アンナ・クリスティ（1930）

ANNA CHRISTIE

メディア 映画
ジャンル ドラマ　ロマンス
製作国 アメリカ
色彩 B&W
時間 89分
初公開日 1931/04
公開情報 劇場公開

【解説】

Ｅ・オニールの戯曲の映画化で、舞台的なもっさりした所はあるが、出演者の芝居の質は極めて高く、本作で初めて喋ったガルボの台詞回しもセクシーで酔わされる。その記念すべき第一声は、“ウィスキーをちょうだい、ジンジャーエールを添えて。ケチんないでよ”。ＮＹで小さな荷船を持つクリス（Ｇ・Ｆ・マリオン）はスウェーデン移民で妻を亡くして以来、娘アンナを親戚の農園に預けっぱなしで１５年になる。そのアンナがミネソタのセント・ポールから上京してくるというので、長らく同棲していたマーサ（浦辺粂子そっくりの面妖な、しかしすこぶるうまいＭ・ドレスラー）とも別れ、娘をその船に迎え入れるのだが、看護婦をしていると信じ込んでいた彼女は、従兄に傷つけられ闇稼業をするまでに落ちて病気になり、二年の療養生活を送った後だった。アンナはその秘密をひた隠しにし、初めは嫌がっていた海の暮らしにも親しみを覚えるのだが……。素晴らしいのは、貿易船から逃げ出してきたか何かの所を父娘に助けられ、そのまま居着いてしまった青年船員マットを演じるＣ・ビックフォードで、直情的で力自慢の海の男が初めて、本物の愛をアンナに感じ戸惑う芝居の、頑健な肉体を持て余す苦悩のさまが何とも言えず良い。彼がアンナを連れ、コニー・アイランドでデートをするシークェンスや、そこで夜、マーサと会う場面は本作のハイライト。心優しきアル中の老女に扮したドレスラーは、アンナの過去を本人から聞いて知っており、そのためアンナは彼女と会って知らんぷりをするのだが、ここで老女マーサは、自分を悪者にして悪態をつき、寂しく肩を落として回転木馬のイルミネーションの中に消えてゆく。美しいイメージであった。

【クレジット】

監督	クラレンス・ブラウン	Clarence Brown
原作	クラレンス・ブラウン	Clarence Brown
	ユージン・オニール	Eugene O'Neill
脚本	フランセス・マリオン	Frances Marion
撮影	ウィリアム・Ｈ・ダニエルズ	William H. Daniels
出演	グレタ・ガルボ	Greta Garbo
	チャールズ・ビックフォード	Charles Bickford
	マリー・ドレスラー	Marie Dressler
	リー・フェルプス	
	ジョージ・Ｆ・マリオン	George F. Marion

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。 Copyright (C) 2024 Stingray. All Rights Reserved.